俳諧

新選年浪發句集四編 坤

4

へ 5
5612
4

門へ5
號5612
卷4

半日庵芳律編

俳諧新選年浪發句集四編

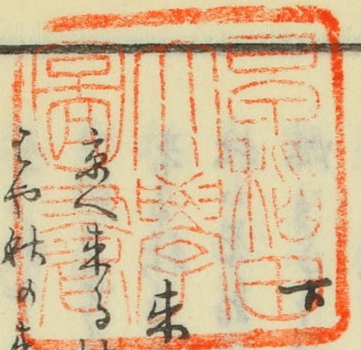
乾坤二冊

東京香同社藏梓

新選年浪發句集四編

下の巻

半日庵芳律選
芝蓋庵文禮校
一具庵尋香閲



朱

秋

あく朱る秋を家もこの家船 伊豫 半窓
家も秋の朱 我ちり掛簾 、 長雪
悔の朱るく音この朱るく庵の井 出雲 春糸
秋八惠ぬ 眼ふ八こ元孫と松ぬ声 芳濃 清泉
朱秋や 寄居ちるく 吟井の面 相模 一和
浮島や 松ちる音 て松ぬ朱る、 月待

秋や来しきたらむ紅葉の煙りより　相模　閑茶
烟の末て幸ふし朝ハ分て秋　武蔵　鹿齢
来る秋の柱にかけし簑の錢多り　東京　兎角
竹よする浪より来るや磯の秋　下総　和款
来る秋や琴門初し峯の松　常陸　樵翁
つひに来る秋や暑さ座敷みて　上毛　巌琴
来る秋のうち白ぐ炒りする新室に　松か
秋ハ来ぬ蓼の花も咲のこりて　東洲
烟もむかふより来るこの江の光り　大城
来る秋や野をわたる楼の蟋蟀　琴芳
来る烟や乾き初る草の露　几堂
来る秋やよい眼に見えしの浪の音　近山

来る秋と知るや信濃へ着くより　信濃　由来
あふ先の秋の来てあり閑さし町　陸中　支山
来る秋や静に鎮く池の芦　後志　鎌一
野ハ広しいつこの来ぬの秋　羽前　花県
来る秋や野毎の家すゝる凪し　梅雛
秋の来し游人の心ゆる新　羽後　弄山
来し秋を報はして知るや星の照　翠雨
来し烟を告る鉢の井　為勤
来し秋の眼に見えし田の畑　文通
秋の来て来さ初られぬ居暑に　湛山
拝心に来し秋知りぬ暁くり　月静
立人ゝて来たりの市の秋　唯風

流れゆる海月拾ひぬ小林　尋香
走れる雲悠然一波立てゝ　文禮
秋の雨ぬれぬ浮ぶ船荷哉　芳緑

初嵐

何とまの小富士ゝ初嵐　上毛　吳羊
初嵐あらしの月淋しき新酒哉　士行
浪先の鐘ゝ初嵐　三岱
音程の揃ひ　清らに初嵐　松か
夕汐の頃根瀬ゝ初嵐　東洲
初嵐温泉山の秋を早そ　信濃　義琴
衛の音の嵐ゝ果て初嵐　豊後　貫山
来ぬるゝ水二ゝ清ゝ初嵐　琪園

塩竈の煙ゝ冬ゝ嵐　豊前　晩翠
ゝ冬ゝ嵐　黙丈
雑魚網ゝ初嵐　稽栖
釣帰深雨せ　鑪ゝ初嵐　洋窓
初嵐ゝ雨ゝ嵐　相模　法味
ゝ山の痩ゝ初嵐　其童
温情ゝ初嵐　羽前　静里
寒ゝ牛の起ゝ初嵐　桂月
海ゝ日も大きゝ嵐　羽後　斎峰
ゝ嵐ゝ雲ゝ初嵐　聽泉
風ゝ初嵐　公木
陸ゝ嵐　風泉

水門の音かすかなる神の社
柳風　喬風

物凄くすさまじき神の森
月雫　月雫

神苔蒸すかぬれ蛙光りけり
東京　寸芳

神の床に形をくむ地や神苔、
生

聖なるものなら仏ゆゑ神苔
芳律

散柳

散神てりそこのかなる弟が
相模　閑美

吹うねりも散るとせのある柳が、
素竹

枝ながら膳の面るなよなる柳、
明石

池水の煙り神なる柳
一如

窓あけてそれいちなる迎弟が
岡蒙

柳橋は西日のつよしなる柳
東京　笠園

傳のくるるもみられる弟、其心
船頭は徐うくくるる散弟
寸芳

物のちるなる散る蔦我れ
武蔵　梅主

ちるるさくさるかうるる柳が、
風雪

静なるりふ散神しし弟哉
常陸　東暁

なるの紅葉世まで屋なる
支山

水強てをしまるくちる柳
信濃　如風

滝美屋まるとは其まるる散弟
羽前　美逸

折網や雑魚なる立るる柳
梅籠

法るるる新なる弟のもるれ
芳晨

洞第をなるよる窓やる柳
桂月

壁ぬるるるるるる散弟
喬風

靜岡にてのつくせもの柳　羽後　清眞
ちるなかれ柳ちる柳、　蘇山
今やかの[illegible]、　松堂
靜なれい橋ちる柳　斎峯
ちりいの一概なつく柳　月翁
靜かにちるなかれ柳　き橋　里山
[illegible]筏流しあるや　上毛　一誠
靜なるて淋しうつる柳、　き越
吟降るさらん、　井月
地を縛り柳ちる柳、　晴月
紅葉のちる流れる、　儿堂
二歌之歌月八暈　義之靜柳　近山

ちり交る葉もなき度の柳うれ　東洲
靜る新し魚の寄りちり江の柳　長吉
きく竹野寺は淋しや流れる柳　琪園
淋しさまさるてちるや夕柳　仝
漣の光る度ちる新竹うれ　等律
夕雲をちるや柳の影葉つ　文禮

稲の花

旅ものうら山曙や稲の花　豊前　赤曉
かりてさそ月出る秋を稲や　半窓
窓よ入る風よ香のあり稲の花　梧栖
題繪く日如ハあるの秋の花　曉翠
蛇の香や旅ものうら寒起心　琪園

月待　稲の花
武蔵　恵鯨
葉哉　稲妻の色、
友山　水口の軽き船てい稲の色なし
寸芳　上ハ神まうせなり蝉の色
上毛　瞬痴　ひとの日知まうせて稲妻の色
都美　香たたつや年のゆたう紙いねの色、
羽後　向景　十分十一蘇ゆ光りや蝉の色
清真　結構な歌仏ゆうり稲妻の花
乗山　稲ゆより今ハ大ゆ年ゆ稲の色
文禮　稲の香や宮ゆハ居きき美綿雲
芳樹　香ゆたちて寄せ来る浪や稲の花

衝突入

常陸　衝突入や昔のゆ世初まり乱れ　月
　　ちゆゆや言葉飾らぬ客主人、　菅花
　　衝突入の姿形ゆ行ゆ騒きゆり、　連
　　つゆゆや花間宮殿の別もなく　樵翁
　　衝突入の暮て這ゆや門の松　東晩
　　ちゆゆや近ゆ寄ゆ来て高砂　月待
　　衝突入の酒樽ゆ高砂　羽後　蘭雨
　　つゆの雫ゆ庭ゆ花ゆ　以孝
　　衝突入ゆ刃き物ゆ活人の表　聽泉
　　ちゆの庭ゆ伝ゆ参て酒ゆ　春峰
　　衝突入ゆ抱ゆハ花ゆ庭の松　喰風

つゝみの借たかりうり　冊子　武蔵　柳雪
御寮人や業内初たる　勝まさり　東京　丹蓉
はきのめ涙かゝして　彦うゝ　寸芳
衝突入や人の世を　又男の世う　上毛　文啓
御寮のに来るを待　乳の掃除　豊前　曲肱
はゝのに嫁を厨を　足られうり　淇園
つゝみや心わるもぬ　拍子かな　半窓
衝突ひを逆てふきせぬ　百勢ぬ　芳律

施餓鬼

床の間うら稿の現く　施餓鬼代　羽後　木風
仏棺を出来てあるゝ　施餓鬼門　翠雨
ひるゝうちから蔦けせう紀　旗　月静

施餓鬼　舟日の入るゝ方へ　風ゝう　隆風
ゝゝかたく子はられ　うる施餓鬼代　鱗一
鈍人の世をてまゝゝ　川施餓鬼　東暁
芦の葉は鉢をゆゝし　川せう紀　仝
焼香のとやきを嬢や　大施餓鬼　武義　可山
舟ゝゝ船ゝ今をて　せうゝ　仝
盥上て　施餓鬼の仏　相模　其山
美ゝゝ世をて蔦れよ　施餓鬼棚　上毛　雙松
蔦ゝをやきの小仏　棚　巌琴
施ゝて心の急く　施餓鬼うれ　信濃　浦楊
船ゝうを大勢生たゝ　せう紀　周防　象年
寺ゝのりを乞ゝ今す　施餓鬼代　未曉

迷ひ子の張札もある施餓鬼や　黙史

地獄よりとる豆撒てゆく施餓鬼かな　東京　眠翁

施餓鬼〳〵た敷ハ夢まぼろしの眠急　雪中

夕月や施餓鬼のあとの静　対芳

つひ供ハあと船ちかくする施餓鬼や　芳緯

彦くろ赤月の西浮やせうき舟　文禮

墓参

線香ハかをる廟や墓参　上毛　湖巖

蓮嬢を業用ひてうらはる茶　松雄

茶くみ人の心ゆうしや墓まゐり　大城

悔い道濃く食うらもちの茶　秀我

茶くみ人あるゆ薄の中ハ墓　義琴

墓参ひ紀子の松をたやや墓まゐり　常陸　玉泉

濃うれ〳〵明鐘を義ゆく墓参　東暁

内のゆ嬢ゆまるやとはうまゐり　羽後　一雪

降る中にれそもし人やまゐり茶　蔵山

ゆくみるうちは新くゆ墓参茶　弄山

拝くまゆ嬢ゆ霧ゆ中ハうま茶　本風

墓参人のゆ供ハたゆうくゆ　琪園

人ゆくゆ茶くゆ雨ひや墓まゐり　曲眺

道をくゆ世ゆ陰くゆはゆ茶　黙丈

吹られく思いくゆれた墓参　岳雪

ゆうひ乳の昔ゆのやくゆの茶　相模　魯石

数人ハくゆを食ゆ子や墓まゐり　月待

金の字を彫りて蜂の墓　横濱　真獨
新しき碑の文字とかなる　東京　本哉
年寄りの手紙　はつ糸
稼ぎ人は親のもとを離れ　白人
道こそ昔のままなれ　墓参　喰風
近くもてつひ知れぬ糸　芳緋

蓮飯

著よけぬ色の白山の蓮の飯　武蔵　拓巣
蓮飯や小蝶の紙を丸ぶ　相模　浦尾女
さすがや白んと葉ごとの蓮の飯　梧栖
蓮飯や隣の客と蓮の飯　晩翠
蓮飯の腰に添ふ塩かな　吳雪

蓮飯を炊らす仏号の燃ゆる　上毛　竹雨
はす飯や其葉ごとの蓮の飯　嶺琴
蓮飯や小料理屋の寄　男　東暁
祝ふ人ごとに蓮の飯　東京　雲峰
香を焚て蓮の飯　芳緋

桔梗

開くべきもの桔梗の蕾かな　伊勢　鈴鶴
折るまでの人形ら信玄桔梗　吳雪
物の巣をもとの切て桔梗うれ　湛園
野ごとの花ごとに白桔梗　赤暁
一本ごとに元の桔梗の蕾うれ　曲肱
咲つけて毎日傳ふる桔梗ぶ　信濃　逸水

雨一杯てるよ遠くて桔梗哉　九堂
音もあるさうな桔梗の開く時　桔華
待て居るよ咲きさうな桔梗哉　東京　貞松
塔のとも柳もれて桔梗哉　眠露
咲ひまを待や桔梗も新の色　友山
数なくて白も弾猪野の桔梗　左
蒼さうな色も絞れぬ桔梗かな　羽後　梧風
明るさを出なくて淋しき桔梗哉　一雪
唐ゝ一露をふくむ桔梗かな　芳侍男　笠枝
虹の端ぬ消るなる桔梗哉　芳緑

苅萱

苅萱の上を飛るは日和風　上毛　梅白
かるかやに風のまとをる秋日哉　玉桂
苅萱や神にあるとも明るかな　松少
苅萱や露を重く降るきぬ　淵巌
うるるかやの穂ゝるもやるる秋の数　黙史
苅萱よさらく〳〵らく新風哉　曲眠
かるかやや寂いくるる庵うれ　上総　白水
大樹ゝ苅萱坊てゝ海士う家　羽後　風泉
苅萱や仁なき風の揺るる　東京　美淵
うるる萱や うるゝ〳〵月の月　寸芳
新夕ゝ苅きし蓬麦の鎌きうれ　文禮
苅萱小樹ゝ井ぬ寄り風　芳緑

紫苑

紫苑さう傾き　新もの憂う家　月静

月新の少屋るあまるとをふぶ　羽前　時明

咲ちるうら歩く伸やまぬ葉花代　友山

芙蓉さふ志をふの名うを仰ぐ　梧栖

風おのの志れなりに咲く芙蓉代　吳童

色るるのおもう言まし葉花れ　琴芳

垣廻にるある藩の紫花うな　雙松

深井に面の時をつ志をふ沢　時月

咲てうら伸野員たつ葉花うな　十勝　祥松

忘れし嫁に柿行るるをふうな　横濱　理客

庄をふ葉花あるや町とられ　芳律

庭掃てるや家花の花の裏　文禮

花野

名ゆ沼は八ら代花野の乱なる色　三竹　蓬宇

嫁入の乗うけいきむ芙野うな　月待

小うるるよき家のある色野代　素竹

うき秋このゝ初るられぬ花野うな　横濱　一舟

見て元八屋る嶽けきる野うな　上毛　三樹

車うら下りて連行つ花野代　三竹

元山に腸をやゝ色たる芙野代　時月

立てれ尚母る花野の乱つ家　九堂

虹の輪を果にしてる花野代　近山

行まう巻つゝ体むる芙野うな　睡痴

細道る負て見しゝ花の京　湖巖

[illegible]

碑をあてた樵夫らく花野の
[illegible]き荒野をな
[illegible]の入り
菩提所の道なき花野
遥かみの杭ぶら[illegible]き花野
[illegible]の花野
小一時憐の日和者荒野をな
[illegible]の花野
山下りて里へ出る[illegible]花野
吹せん[illegible]日花野
[illegible]憐の花野

信濃　碧水
逸水
花野
湖園
未曉
東曉
樵翁
友山
仝
羽前　如風
梅瓶
仝

行兼て小松が芝なる花野をな
山路出て心虔の花野
面白き旅寝の花野を太左
馬法らく本の[illegible]花野
虔色て眼の[illegible]花野
小[illegible]立て連[illegible]花野
旅囊井に[illegible]花野
角川道を経[illegible]花野
[illegible]花野

唯風
嵩峰
以孝
為勒
清真
松嶺
[illegible]芳
文禮
芳律

二百十日

藻研[illegible]行かく二百十日の
[illegible]の音[illegible]二百十日

唯風
嵩峰

鶏の鳴く二百十日の前夜の警戒　羽後　素泉

落ちて音絶えし二百十日の夜、　貞峯

松の月二百十日の雲ながら　蘭雨

船の中の待合かな二百十日なり　東暁

夕嵐や二百十日の稲の穂　義琴

静さにたゆたふ二百十日なり　我

二百十日咲のうちにもつれ　丈芳

晴と雨て月出る二百十日の宵　丹蕉

家毎に祝ふや二百十日の風　里月

鶏鳴に二百十日の明ける　其燭

ちらほらと二百十日船繋ぐ　魯石

静さに二百十日の屋根を経　浦尾廿

鶏の鳴く二百十日の雨　默史

松の葉の鶏鳴に二百十日の雨　半意

二百十日南かぜ通りけり　芳緒

秋雨

行く雁の雲の中にに秋の雨　弄山

降れば降れ西の小窓に雲の秋　月静

柳蓋の色の沼に秋の雨　琪山

秋の雨山うら蓋て仕舞ひけり　羽角　里生

心の内秋の降るに鶏の、　結子

晴るれば早入柳の秋の雨　光昇

月の鶏小沼の降や秋の雨　樵翁

秋の雨鶏うら蓋て寝ぬ　東暁

旅の夕ハ殊更淋しく　杜の面　下野　魁梅
人心混じり勝なる　杜の面　亀鶴
降る音の落葉に交る　梅の雨　里月
洲の帰の音も寂々　杜の面　相模　月洲
持て帰ハ音も侍る　杜の雨　一如
初夏なれ日の暮ゆ　梅の雨　眺翠
濡て来る夕の美能　杜の面　芳緑
度ぬるに降ぬ　杜の雨　文禮

杜鵑

杜鵑の深き音なこう　杜の面　峰仙
鳴て　杜の花　玉泉
初て来る杜の数　聽泉

降ぬ　梅の雨　蔵山
明て杜の寂ます　音の面　浦梅
鳴て遠ク道ク杜知る　来晩
杜の数ハ寄ル　杜の音　半窓
さしる夜て　杜の音　文啓
夜て来て地を遠ク　梅の音　玉桂
聞て　杜の音の面　呉羊
多をぬらす　杜の花　横浜　梅月
近年ハ　梅ハ聲　一舟
杜ハ　音　寸芳
音の根を　杜の音　白人
なきけ　杜を屋　音　芳緑

鶯

霞も晴あらそふ野の鶯の
鶯の方うら淀の舟の室　羅琴
鶯の音ふる服部や峰の鶯　芋城
鶯の音ふる服部や峰の鶯　都々美
山の陰ふるあり鶯　梅白
野と鶯と鶯峰の山家　上毛　頼一
華ふき来る峰の鶯、　松塚
野の鶯引や鶯の野中之　貫山
社の鶯ふる鶯の野の鶯　友山
苔の中雪や島に鶯峰　羽前　一軸
月に鶯鳴て鶯　梅軒
霞の鶯も鶯ふる　美迩

野の鶯や鶯ふる文字の鶯
川音に紛れぬ声や鶯峰　一多
ふる宮に鶯ふる鶯戸や鶯峰鶯　奥麦
来る雪ふ鳴ぬ鶯のふる　文通
鶯鶯鶯鶯鶯鶯鶯鶯　凡泉
見ふ鳴ふ鶯の鶯ふる鶯　梧凡
雪ふ雪の来る鶯峰鶯　連
鶯鳴ふ野や鶯ふ雪の色　可山
鶯や秋の陰ふる鶯　寸芳
鳴陰の月や鶯の鶯ふ雪　眠鶯
天野の秋鳴鶯鶯ふる鶯　梧栖
鳴ふ鶯ふ知ふ鶯ふ　黙史

尋たき道を人をしのぶ　晩翠
紙ぜうな数の門ゝ帰路　湛園
沖をゆく旭のさす方に　駿年
夢さめて見まくに帰るうらぶ　文禮
金の名残を門前すゝ鶯の　芳緯

放生會

年毎の放生会しの放生会　咲風
時上る宮もたの田　月静
連て来し方へ帰りの　為山
殺生は慈悲を返るの　而采
放る人も殺鳥　湛山
ちらくもさもたゝ放る　素泉

はたをた宮も時し放生会　弄山
沓伸して足送るもや殺生会　相糸　如風
佛も縁あるはく放生會　祥松
ひもり飼ふ籠のもれ出るの　逸城
雪ゆらんに宮も慈悲忘れ放鳥　信濃　如楓
義まぬ節くこの葛親やはの　義琴
高られぬ声やきの放鳥　琴芳
放生會目白ハ籠くもるの　松め
焼肉の外へも乗をはるの　雙松
籠の戸に足繋ぎや放る　上弦　怪怪
箭を出て野の餌に能よ放る　白水
ゆくて飛てもよいの世く放鳥　相模　法味

放されて寒しく初もみぢ葉の色　梅月
鼈の甲酒臭し　放生会　森糸
常さまの寄る者らぬ人や放生会　俱園
篭さまの放れもさまの放生　空
鶴八幡一鯉を躍らせ　放生会　吳竹
あること中さく拾へ人さまの　曲肱
放すさまよい餌匂ふ藪の鳥　貞松
鉢のさまもさまの放生會　芳徘

牛蒡

よい時ふ閑さまもれ牛房引　吟風
まかさらぬ老の分や牛蒡引　南東
世さまよ引事ぬ牛房の引さま　連

葉のさまに引事ぬ牛房の引さま　松雛
雛入てゆさゆさに引さまさま　玉桂
新上りの為に引さまさま牛蒡　一知
引さまさまに学人の事ぬ我牛房　狸窓
手庫に引き情さまぬさまさま　風考
引ぬさまき程さまさま牛房　蒼柳
引さまさまの暫く白い牛蒡哉　垂鈴
小俳の切者さまさまさま　白人
引さまさまの割さまさま牛房　曲肱
ひきかさまひ程さまさま牛房　黙史
引れれの浅人嫁白い牛蒡哉　芳徘

蕪　菁

世の中に人幸きを　時なる若草
訪ふ裏富士見ゆる高い海まで
口の合ふ人京の御所　若草
其作倍に移りて吸ふ　若草
つまき香も仁年　其の風味
年うらやむ　癖もあき若草
ひとを惜しむ　振舞ふれる　若草
見かけより　強き　春に　若草
高先も　小さく　ふれる　若草
中に　乾加減の　若草
若ものうら　移ふ　若草
解れ　解を　詰めて　若草

嵯風　一雪
聽泉　清泉
楢栖　栖
来暁　晩翠
御巖　井月
一城　九雪
士行

義琴　可山
雲峰　陶茶
魯石　す鼻
芳緒　文禮

若草　又　義の　味なれ　若草
さくら　見れ　ゆく　集き　若草
乾く　日の　色も　ひしき　若草
殊なれ　いろ　香の　淡き　若草
減く　や　ま　婦の　ひろ　若草
彩　毎に　詩て　見る　若草
紫　稲　も　ひす　人　ふれ　若
老て　り　妹に　紫く　若草

龍田姫

菖蒲　いろき　郡　すく　龍田姫
雲　も　半き　く　ひ　ほ　ふ　竜田姫
夕虹の　裏く　表　や　ひ　く　龍田姫

嵯風
為勅
素泉

新うゑ反の水や　新田姫　聽泉
童田姫たれ〳〵あそぶ苔むろ　靜里
地を抱く山ふもとや新田姫　花暮
雅ゐらふ蔭の綿よ　一和
曙や綿摩ゆ　新田ひめ　閑美
我恋ふ新田姫　鬱石
織なせる山の綿や　童田姫　古山
賜ふ〳〵す入日の峯や　新田姫　其山
雅川を降る綿や　たゝら姫　狸谷
ちら〳〵に新うゑ　新田姫　東晓
すゝき皆子姫に降る田姫　巖琴
桂男を降ぎ　竜田姫　芳樹

寄月恋

わが恋ハさゝなりわかるる月　喧風
人の世く支科　月の秋　月静
月の新も庚〳〵ハさゝ　さらハ頃　聽泉
頃ゑ新てらしらう暮る月　松堂
やゝ〳〵月ふ加ら夕新ふれ　花暮
初ふ夕ふ月のおもかゝ　一軸
月ふ風の傾ふ　東晓
月為て恋ふ町の灯う軍　時月
誰やらん月ふ〳〵やく　松の径
みゝ〳〵ふ月ふ〳〵ふ　玉桂
往人の事ぬ新ふ似ふ月の面　吳羊
義琴

立停まちあぬ月新の戸にうれ　梅白
胸さわぎする新や月の時雨り　逸水
吁詐の月ふるえて砌の閨の月　半窓
行衣や伏行月を暮れと義　呉雪
元弁す月ふ宮ふ嬬子の帯　仝
芒穂ケ編も深うれ月と水　仝
浩れなきを人まつの戸に文る月　徽年
悲ひ音の琴や月新のあくん　梧栖
初恋や逢ふ新の月を砌うき　黙丈
砌うき移ケを思らす月新ぶ　風寥
清うみて水ふうらみ矢月のや　狸窓
窓の月ぬ〜なき松かゝ〜り　月待

月逢れハ月逢る月のうれうな　仝
有明や蘿のもとにおわ〜ま　仝
初月の松つ〜ケ〜ま月の月　貞松
小新中や宮ふうれて月る帰　文禮
室性の葉りや月の芒り深　芳律

青不知

いさ〜ひハ雲面ふの月新うれ　蓬宇
ゆ〜ふ〜ふや時り合ふ〜ま沒うら　素仏
青新や隣ま借り提的り　其山
既年や心船急うれ寄斗り　一知
い〜ふひの関うれ心〜池の響　蘭雨
既年や中〜の蓋とる松お声　弄山

いそらひや弾たみ〜この手芦の園　喰仏
青ふ知や廣野にけ〜き松ひ本　清真
勢ひ手〜歌ものいそらひや世紙　素泉
いそらひや産の定生れハの名月　湛山
いそらひや嬉ふそらる葉の亭主　白人
青不知や取附〜たる細の魚　赤曉
いそらひや急うぬ道のかすみ　晩翠
既望や山の裾り　五位の声　吳雪
いそらひつそるるにつるや河舟　嚴琴
青ふ知や　消う〜れ山の雲　睡痴
いそらひの周や名橋　そらるうち　東曉
いそらひや雪ゆみ〜うき芦の節　鐵一

青ふ知や釣舟入〜舟のひま　芳緒
いそらひや冬の〜や須磨の浦ひ　文禮

うそ〜

うそ〜葉や月の照遠く霧の中　春司
うそ〜葉や天〜知る雲の夏　一和
うそ〜葉や木賃の小行燈　月待
うそ〜葉や近〜山の霧　雪花
うそ〜葉や乃ち亭仲〜水烟り　連
うそ〜葉や生迫〜古着屋　逸戒
うそ〜葉〜ち〜ぬす百姓の光　友山
うそ〜葉〜〜雪り野路と梅の上　花昇
うそ〜葉〜〜や湯治傷んだ霞　芝蕉

[illegible]　峰風
[illegible]　新峰
[illegible]　一雪
[illegible]　菌雨
[illegible]　仝
[illegible]　歌年
[illegible]　湖園
[illegible]　春線
[illegible]　晩翠
[illegible]　東晓
[illegible]　默史
[illegible]　曲眺

[illegible]　有明の浦
[illegible]　歌の関　芳緯

露　雪

雪　雪の人[illegible]れたる　鶴の雛
露　雪や火活にもぬ　鶴の雛
[illegible]　水ふれたる　畑の道　岡茶
[illegible]　雪や芋刈　藻の丹の先　月洲
露　雪　庵の　芋の中　岡美
雪　雪や五平[illegible]　肥後　清泉
[illegible]　雪や[illegible]の自の[illegible]　芝葉　湖園
露　雪　新郷いよき　默史
[illegible]　雪や　雪　半窓
[illegible]　雪　雪　雪　井筆　柳風

露をも灯新細り　田舎町　逸水

ほのぼのと室の明け行く　賀山

雪をも麻ら麻ら　上七　一鼎

露寒し月すみ渡る星の照　洲巖

つゆをも樽の下に　道祖神　近山

露をも石の屋に苔の経　九堂

ほのぼのと　起てもゆかぬ庵　三雄

露寒や船を上り　井月

露をも　野菜の市の明け行く　松雄

露寒し　行くへ留守なる雪の小家　義琴

ほのぼのと一まいの家に数　白水

つゆをも山田のうねの蜂　下孫　有隣

露をも炊き煙り来る菓の中　常陸　如風

つゆをも鶴の鶴のまま居て　樵翁

ほのぼのと蓬の上に秋の月　仝

露をも沖の霧　東暁

露をも有明の　連

ほのぼのと安き山の白芙蓉　友山

雪をも紅の機織や彩雀　明治　まさ子

露寒し　深情に舟待つ日　結子

つゆをも　刈芝ほのぼのと　里生

露寒し　横抜く火の白み　水風

雪をも　蘿に出き　琪山

露をも　花雪の手ぬるす　梧仙

蟲きゝも連行会すゝうれ道　清真
蟲きゝも　葉毎　〳〵に星の照　禪松
はるゝ山も忍ぶの付しゝ　仏の節　東京　一山
友の門しして蟲きゝも　虎ゝうれ　すゝ芳
秋悲しゝ　蟲も聲さの数る入　文禮
蟲きゝも井の根岸の　好らみ　芳絲

燕歸る

乙鳥寄る　海しぬ　菴の閑　喰仏
海しし　先燕きゝ　ゝたきのゝら　月翁
乙鳥ん　海ゝ　乙鳥　閑ゝ　弄山
燕よ人の宝ゝて　立ぬれ　乙鳥　素泉
人の事ゝ　つゝぬん　往ふし　燕うれ　常陸　如仏

巣ゝ　乙鳥れ　我　善
ゝゝ　海ゝ　海る　近山
乙鳥ふ　ぬ　寄ゝ　琴芳
海るゝ　ぬ　海ゝ　武秀　柳尺
歸るの　欲才を　偽しゝ　乙鳥れ　蕉鈴
いゝゝ　ゝて　仕舞し　乙鳥れ　吳雪
寄事も　なく　海ゝ　抜ゝ　ぬ　梧栖
乙鳥の　知て　往ゝ　ゝ　ゝの雨　芳絲
ふをつれて　舟ゝ　ゝ　燕ゝ事　文禮

山雀

山ゝゝや　ゝゝすゝ　ゝ　藝の曙　花鶏
山雀や　陳　寄ゝ　往ゝ　馴れし　晩翠

山雀や名ゝ知ぬ谷の藪　赤曉
ゆきをもて小山ゝ龍人ゝ　吳雪
山茶や生れ付たる健気もの　柳枫
ゆきうゝやあゝ山ゝ牧に立の姿さ　常陸　永嘯
山ゝゝや餌にゐあされて籠の中　東曉
山雀の声に時ゝ鳥　春峰
山茶も人ゝ樹蔭の日ゝ　爲勤
ゆきうゝや籠の細工ゝ書る　聽泉
山茶に餌ゝれて人ゝ子ゝ　祥松
山雀ゝ山を知たる日　免角
ゆきゝゝや智の点ゝ　松虹
山雀をとゝて子ゝ掃除ゝ　峰

山ゝゝの美や鈴ゝ起ゝ　文啓
ゆきゝゝゝ明や地の朝ゝ籠　士行
山茶や水も器ゝ　其山
山ゝゝも害先ゝ　魯石
山茶や能ゝ名ゝ　閑茶
山ゝゝの藪に住ひゝ　狸客
山雀ゝ鳴ゝれ籠ゝ　寸芳
ゆきゝゝの樹蔭をゝ　笠枝
山ゝゝの手て美ゝ　芳律

醉醡醡

磯礦醡や新ゝ入る新の藁き馬　巖琴
とひろゝや鶏ゝ樹蔭の市もゝ　都々美

碓氷峠にて旅のつれづれ

碓氷川や拾くて独り居

やひろくて高れぬ市の立りする

やひろくやせれお憑の客仲間

碓氷峠の茶屋にて 縄暖簾

ひろくて淋の茶屋にて

酸醐酸よ強くて罪なき

やひろくやたのくて人の家

碓氷濃や 樵夫のうつの声

ひろくや 機織上戸の袖に

碓氷峠や 働く輩を

やひろくや 相模 青圓

八一二林

湖梅 逸水

如風

支山

黄邊

梅翁

一雲

聽泉

の鼻

東曉

法味

碓氷川や 馬冥加にて

やひろくやひ地く歩てうら飯

碓氷峠や 茶屋の代わり

ひろくやひ地入れる士の

酸醐峠や 馬も駄賃に立場茶屋

やひろくて 茶くうるや 本陣宿

藥師

野ひ山へ立やうれひ 藥師

奥の院まで 道連よ 茶屋

婚ひひ 茶屋ひ つ山路

堀て歩て 傳支 知らぬ 藥師

様の歩て 婚ひや 茶屋を 焼くあと

待月

雲峰

真獨

鄙寄

寸芳

芳緋

藥師

嘯風

月静

奈峰

友山

松虹

健なるかな　葉ちり　葉ちり　武義

婚ちうら　葉ちうら　英仙

擢ん方　山根に　蕨婚　可山

[illegible]　婚時の　蕨の　仝

猪頭の　道も　蕨ちり　嘉鼎

素の世の　昔語り　蕨婚　月洲

ふるうる　香の色や　葉ちり　法味

花も実も　笑て　蕨ちる　一徹

風流の　折ふる　蕨婚　倶園

鶯語も　一日　蕨婚　梧栖

蕨ちり　月も　蕨婚　丈芳

[illegible]　蕨婚　笠枝

[illegible]　蕨ちる　芳律

婚別て　早く　蕨ちる　もの　文禮

梨子

梨子も　歯ぶ　叶いぬ　虚る　老ぬ　喰風

山ぶ　やぶ　ぶんぶ　らぬ　味の　文通

梨子　棚や　おれも　ぶる　なる　向泉

秋の　味　慣る　ある　梨子の　以考

[illegible]　梨子を　ぶる　逸我

泡宜　いぶ　名も　ゆ　梨子の　味　逸水

取立の　梨子や　むく　を　俤の　水　曲肱

梨子　棚や　名も　泡　ぶの　素　所巖

足時　ぶん　ぶい　蕨ぶ　梨子　畠　素仆

洗ぶる　名も　背ぶん　ぶる　の　味　風壽

梨子へて溷も嫌しき土産哉　芳緑

荔枝

葉かくれの蔕るゆゑ透て荔枝哉　半窓
口明て小雨の祝くれいしうれ　友山
梅雨毒はまそてそたる荔枝哉　白茶
笑面を子のもてあそ荔枝哉　永哺
黄ふまは味ひもらぬ荔枝哉　雲鄰
色よ雲仙味ひもそるれいしかな　千峰
紫すもも物見しき荔枝哉　浦尾女
仙人も手ぐ味もらぬ荔枝なる　義琴
元のまゝ荔枝や色よ巻る簾　芳緑

無花果

無花果や　紅葉ちしき黄ひ方
黄色果や　見れ寺ちもひ物
無花果や　嬉きぬ人も来ん
黄色果や　達の瓜ある盆の上
黄色果や　葉新に早くたかく
無花果や　咲ん嬉ひを笑とる
黄色果や　一文菓子にまちひ迷む
黄花果や　色の法ま仏寄のつ
無花果や　松文ゑ多樹と云仏
黄色果や　寄もつゑ寺の
黄花果や　無ちん日を京に岸
黄色果や　猪垣　潜る里ちく

嘉峰　梧風　里生　東暁　其山　狸客　義琴　芳琴　半窓　来暁　黙史　梧栖

安芳果や赤簾好きの医者此門
等知果や駒男淋を持一案　晩翠
芳緑

色不變松

色うつぬ松ふたのしむ紅葉うれ　嘯風
色うつぬ雪ハ花をうつ植木市　為勅
色うつぬ朧も雪のしら子雪為　向葉
注連縄ハ朽てもかつた松の色　一雅
色うつぬ松たのもし紀垂水うれ　祥松
色うつぬ雪うつ引や紅の虹　逸我
いろ変ぬ松まうしきタりうれ　岡葉
色うつぬ雪たたのしき月ゆゞ　一知
色うつぬ　松の縁起や古社　黙史

幹の苔まゝ色うつぬ松　吳雪
色うつぬ松の眼ふたつ廣雲うれ　青我
色うつぬ雪や野中のあらしも　湖巖
いろうつぬ松を従生の葉うる　玉桂
色うつぬ雪たさん立つ月ゆゞ　士行
色うつぬ松ふたよりや志賀浦り　松虬
岩う根や子代もかたらぬ松の色　蒼柳
色うつぬ松うつやまし糸白髪　狸居
いろ変ぬ雪よ照今ハ旭う雨　寸芳
かたらしな千代田の丘の松の色　仝
色うつぬ雪や紅葉に元巻れ　文禮
色うつぬ松を力よ老の秋　芳緑

秋述懐

紛れんと即ち方なく秋の暮　蓮宇

見るものに皆秋の深み夕ぐれ　花鶴

世の中も如何や満ればかくる月も又　青園

人の為る涙に眼見えてきりぎりす　素竹

算ふるや数ふの違ひし已の年　黙丈

寝覚して老の身を知る秋の夜は　晩翠

啼子引きもの何ありぬ病上り　呉峯

秋淋し浮まん惜しみ見る鏡の錆　友山

淋しさや老となりて葉の露　聴泉

ちる秋や昔を尋ねの旅日記　月静

秋風に吹かれて縺るしら髪かな　喰風

秋めの吹くふあら旅と秋の風　羽前 素人

降ら降らん旅の衣を秋の雨　二昇

老の身にそら寒て吹や柳の褌　东暁

家老も物ふ扇そくりけり　芳律

虫の音も力うすしき住み家かな　東京 文禮

行秋

秋も世く名残に近し葉勝　蓮宇

惜しみ其うくれの気夕猶　義琴

行秋や萬を迎ふに惜し　瀬巌

行惜しむや野の果山の色　貫山

吹切て秋はゆくなり葉の蔓　湛園

ゆく秋や重ね着させる眼になす　菅花

あなうに秋の旅屋の煙りかな　魯石
秋ふかしらしら秋ら桶の箍　月洲
ゆく秋や子等の上るる家　法味
行秋や茅屋もるる所　美逸
行秋の見れば枯ら松柏　里生
行秋の姿とうつぬ雛木山　可山
ゆく秋や川辺の柳　音生
栗柿も赤になるく秋と成りぬ　東京　致堂
ちりもうり柿きく秋の竹時雨　芳律

神の旅

野山なる御引ゆく神の旅　義琴
ちりとぶの浮世て秋神の旅　三樹

真ちりなる筋や神の旅　文啓
ちりもゆるき方よ神の旅　常陸　如風
那ひるまれ行なる神の旅　東晩
行やれかと神の旅　仝
日御まる早きあるひや神の旅　連
曇きるに思ならん神の旅　友山
降れいとて涙ある日や神の旅　鶴子
八ちまるの風に雲や神の旅　一魯
松風を常とふるおよ神の旅　聽泉
鳥の果まる時と神の旅　南峰
吹風は足鶴ら神の旅　祥松
時とる空る神の旅　逸山

海山をあれくぐはせる　神の旅　其獨
神の旅　雪をかりみ　仙地の　英仙
まき風の　空を吹月や　神の旅　白人
冬やの　わかや神の　かしまち　対芳
風筋の　ゑの人神の　旅路　白華
人を野に　出る日和や　神の旅　黙史
旅立を　おくる　心の　神詣　曲眺
花の宿　春をあら　信神の　旅　芳緯

初冬

初冬や　仕るの　矢きゑ　喰風
ちゝの　日和や　陸を　真砂
初冬や　寄もてる　の　二梅　友山

初冬や　南へ　ゝ　夫　親の　西間　芳朱
ちゝや　旭ふ　貴を　ゑる　池の　魚　浦梅
初冬と　知るや　山家の　柚の　蔓　樓栖
はつゝに　初る　山の　姿　うな　曲眺
初冬や　俵ふ　ゝ　ま　臺　生　港園
初冬や　芹の　長根も　市の　曙　半窓
ちゝと　心も　つゝ　天　元　弗絲
初冬や　彩　ゝ　屈　山の　紅　柳司
初冬や　何の　降や　親の　靜　浦尾女
ちゝの　市　ま　や　背戸の　紅煙　素弗
初冬を　何　ゝ　ゑて　田子の　浦　左晩
菜大根の　甘　も　冬の　ち　ゝ　巖琴

掛蒔や初冬ら〜き他の煙　淑巌
ちらでや玉巻へ運ぶ囲い米　可山
初冬や色さまざま〜ん並ぶ山　其燭
ちらでの風や笹ヲすかす舟　寸芳
炉に縁のもゝを色のもゝめぐ　仝
初冬や何ゆ〜集る雨の鶏　如風
ちらでや家鴨ら酒る味の出る　芳緑

初霜

初霜る上ちらで家根の紅葉　喰風
ちら霜といって早立初雪ちら　月静
初霜を掃ら下る小舟ち軍　清真
ちらで霜や寒の雪も常ら仙炭　貞東

初霜や赤く色深き州のうへ　秀川
ちら霜や初雪〜等混る皇宮の庭　羽糸
初霜や色ちれぬ多の庭人来る　如風
はちら霜や鶏の蹴ちらす掃溜ら　芝蓉
初霜や帆棚の上は柳条屋　花昇
ちら霜や紅月光る華表先　洋意
初霜ハ多鞋ちらた宿る〜ら　晩翠
ちら霜やきの〜仕上ら庭迄ち　栖栖
初霜や漆子ゆれハ熊い旭　岡美
初霜も知らぬちらで菜大根　浦風女
ちら霜ら高ら宿しの野ゆけ　月淑
初霜や ちらと点 朝の月　其燭
一舟

[illegible]

初霜や はつ〳〵して星の沈むあり　風齋

初霜や 紅の[illegible]を 冠せやす　雲山

[illegible]霜や 寄せぬ星の照　嵐雪

初霜をうけ〳〵 落ちや 蘭柑子　梅白

初霜と 見る宮 毎の[illegible]　雙松

はつ霜や 寄せぬ 妹の香もなき園　井月

[illegible]霜や 妹をうらえて 月もめ　三岱

初霜や 紅三日月 [illegible]　文禮

冬雨

結ぶ 結ぶ 豆腐屋 寄せ 冬の雨　喰風

さく 蟹の 逃げ [illegible]の雨　[illegible]昇

冬の雨や 物ふ 紛れぬ 雨の音　逸水

降ぬ ちに ぬくいひ あり 冬の雨　如桃

北山を 大ひ [illegible]の雨　上毛　逸人

灯 [illegible]て 脱[illegible]や 冬の雨　一誠

芦の葉に 軒 [illegible]冬の雨　松岱

高れ 芽の [illegible]や 冬の雨　近山

松 [illegible] 松の 色 [illegible]の雨　仝

降 [illegible]山 降る [illegible]の雨　一和

晴 [illegible]本の葉 降 [illegible]冬の雨　魯石

冬の雨 降 [illegible]　倶園

よい月の [illegible]降 [illegible]冬の雨　黔史

晴れ ハ [illegible]根 [illegible]の雨　仝

裸木に一音のなくまんの面　赤暁
枯を咲さうなぬくもり　梅田お雨　芦童
埋れる落葉のあるもの　雲峰
滴てもる用の生るもの　紫山
油屋の灯火もや　みのあめ　寸芳
ふるさとの美　新生命ら　雨もり　芳緑

枯葉

禁足地に一菊は枯るる庵の閑　月待
菊うれて外小布仏の一茶三昧　閑葉
勝葉や枯るるこゆる　心と位　杭九
葉枯ぬ泥うて仕舞ふ　貧仏　英仙
枯てもくんるません　庵の葉　恵鏡

枯葉に一蓮生に成る本れる　常陸　如風
菊枯て通てうなるる新所れ　可昇
枯菊の赤く眼に残る色香の事　信濃　蓮殘
かれ葉に成てこまれぬ畠う葉　如風
枯葉にゆったりきす新ちれ　都々美
禁殺に枯ても葉の白ひう事　洲巖
菊枯て前寺勝るなる庵うな　白水
枯くにたうてもあるれ葉もひ　梅雅
葉枯て引くるる遠ちく庭男　静里
添弔もやるに枯ちく庭の葉　友山
枯れれハ名も高れ色菊ハ色　蘭雨
菊枯て元力なるく幕う事　清眞

枯薄や　香のゆかしさ　ふる郷　曲肱
夢枯て　ゆくぬる日もある　柴戸哉　衆年
枯菊の　神やつれなき　ふるところ　対芳
枯ちるも　大るかりくく　兼造り　芳律
菊うれぬ　さ　掛奉の　残れ月　文禮

冬構

向うなる　松や　庵の　冬ごもり　呉雪
世ひ　ゆ　をくなる　冬構　曲肱
をくらき　家や　田中の　冬構　来暁
をゆの　通樋　月をうる　冬ごもり　晩翠
本波は　南分のら　冬構　梧栖
江里は　早　冬ごもり　上毛　玉朗

風ふみを　ゆをうて　冬構　一鼎
絶過て　垣や　をくる　冬ごもり　時月
人をく　人をく　ほるれや　冬ごもり　睡痴
庵の戸や　米一俵の　ゆ　構　嶽琴
ぬくるみ　へ　ゆ　をうせて　冬構　相模　青圃
不安なき　時代の　姿　ゆ　冬ごもり　松虹
日向ゆ　一家さ　ゆ　をくて　冬ごもり　狸客
芝栗の　香も　ゆ　をくなる　冬構　雲峰
椽ゆ　つむ　椎　葉も　ゆ　冬ごもり　兎角
樋ゆ　ゆ　を　庵をくる　冬構　連
樹裏の　浮世　新や　ゆ　冬ごもり　秀川
内ふ　をくる　まや　松を　冬ごもり　一香

暖かなる小家や　きくうま　清真
急がるる構なく　まなれ篠　文通
引き寄せ　こなせ　畑や　冬構　淇山
年ふる畑の　枝や　ふゆうま　萬勅
冬籠冊の　始うれ　まうせ　以孝
たくさんて　引き　柱や　冬構　仝
遠人たち　柔の　摩さる　冬構　月静
嶽くの峯　ふるて　きくうま　羽角　柳風
帳柱を　引たつて　冬構　素山
二三日大工も　入てうゑ　ふゆうま　友山
引迫く　枝　植うて　冬　素竹
浦士の家や　見　冬　構　芳緋

天長節

香を等な節會の　庭に菊の　義琴
子代八子代　うるうん　の葉の　花　玉桂
浦濱の天長節　や　船　ふし　逸我
民とも今日　ゆらん　葉　逸水
きやうても節の　新日　松虬
代られ　天長　相模　鄙亀
掲げたる　旗のあ　ぎ　青圃
葉の香や　天長　の　月待
日の旗　靡　新　梅雨
あれ　日　祝　聽泉
祝ふ　天長節　葉の　月静

暮や　天長節　の　門帰陳　　貞室
蘆ちる　紀ての節　の　日は　　祥松
忌の代や　屠く　日新を　仕くる　　歳峯
宮人の　かさしや　薬を　ちるの　曙　　芳緯

芭蕉忌

ちる紙屋や　栗津　泊りに　見る　金みち　　喰風
時雨　合ちる　ちるや　旅　　祝　　湛山
箱忌や　心　の　合ちぬ　人　　紀　　蘭雨
芭蕉　忌ちる　涙ちる　忌の　ある　歌　　清笑
芭蕉忌や　初ちぬ　客の　丈一人　　李川
ちる紙屋ちる　時　ちて　ちれ　ちられ　　梅雄
時ちる　合や　忌ちる　松の　角ちる　　一舳

庵帰てまた　ちる　ちる　の　時　ちれ　　東曉
芭蕉忌や　槭　ちる　祝　ちる　ちる　き　　樵爲
ちる　ちの　新ち　時　ちぬ　箱の　日　　松か
芭蕉忌や　風流　ちせ　客主人　　玉朗
枯枝の　移ち　時ける　　箱は　日　　黙丈
祝詞ちむ　声ち　時ちる　角ちる　　可山
ちちちや　今ゆ　ゆちる　き十二日　　雙松
実を　絡ち　言の　葉ちや　箱ちる　　月待
ちち紙忌や　羊羹ちる　　庵ちる　　月洲
枯のこる　蔦ち　弾猪や　箱の　日　　素牛
芭蕉忌　そいちち　蝦夷の　侍ち　　牛窓
ちち紙忌や　言葉の　花は　世ちちる　　吉窓

時雨降ぬ深きちなみう　一山
芭蕉忌や生れ合せし二百年　芳絆

子祭

子祭や井あるうしの世の上手　喰風
子まつりや人を伺ふ子宝　素泉
遊ぶふとの人の提ける子焼心　以孝
子祭や年寄のある家の曝　梧風
子まつりの例やきかしき傳ものの　花暴
子祭や鄰の子の多能物　静里
子祭の日の入船の紫肉うれ　常陸　如風
子まつりや代々の傳うの吉小判　樵翁
子祭や百姓なれと小ゆひ　東曉

子祭や拾ひ上げる鶏　沖水
輪を仕ける仕掛ものし子焼ん　白楽
子祭や寄ぬうちから灯のまる　玉我
子まつりの豆腐屋　如風
子祭や庭もせまし情心　花鶏
子祭や独り得意も嵐算　吉窓
子まつりや客待ち宿の豆飯　一如
子祭や嵐も遅ぬ人心　寸芳
子祭や夏の足悟の客まつけ　芳絆
子祭や冬あれこうなるもし数　文禮

酉の市

熊手買ふ心とゝまる酉の市　其燭

若のうるや市の我うの幸所　葉柳
買選の態の態るや雨の市　雲峰
押されて重き態るや雨の市　樂友
芝とい賞物るや　とうの市　一徹
倒して寄る葉屋るあく雨の市　晴月
三段ともまうけ日和や　とうの市　琴芳
子や態るや寄うて雪もや雨の市　芝蘭
態るや寄い旅いるあう面の市　俱園
若も揺る態るや寄とや雨の市　常陸　雲徹
重さうな態るを嬉る市成う　芳緑

袴　着

袴着の年て高砂うる木馬うれ　喰風

袴着の中と届くや　神の絵　清笑
とあり活着てきのり遠い行儀う　南東
袴着や行儀よて　成るる新さう　友山
はうるや着や筆いるや豆とい　玉暁
袴着をはゆつい外す服続うな　連
はうる着や一寸すい　無い世の子　梅白
袴着や抱て見せ　神の松　柳巖
とうる着や永るくるや　都々美
袴着や行義よ　常の育てのう　美雪
はの活着や勤遠るる紅毋の前尾　栖栖
袴着や成とる　人と育うう　弗緑
はうる着や宮参る　借問　芳緑

新見世

新しきや霜枯時の世の中に
顔こそや袖風立て通る人　義琴
かぶりきや素人似ぬ若衆　美我
新しきや　雲もゆ人ぬ連の来る　雙松
顔見世や　評判立てかくり物　赤暁
かぶりきや　惚れ人ぬ紅　曲肱
新しきや　人ぬ押さぬ角力　倶園
新しきや　寿　揺ぬ　東暁
うかれきや　田舎玉意の　鳴ぬ　青花
新しきや　未られぬ　笠の人　悟悟
顔見世や　ぬ　夫付て　ひと景色　法味
一和

かぶりきや景色を飾り物　青園
新しきや　音羽男　京和や海　白人
顔見世や　新の　明ぬ　人通り　白景
新しきや　市伝ぬ　ぬ　別な人　芳緑

金長

鶴帰て明る新年　紙衾　嵯風
雪洗てまて　厚き衾　一雪
松風や　琴も　鶴ら　紙衾　真実
絵ぬ新の　振仇や　紙ぬ海　斎峰
振ぬ　ふすまの内ハ　世界　羽布　梅蒼
中ふ風流　ぬ　ぬ　古ふすま　友山
絵衾の　諸　や　ぬ　逸我

色しるき文なんうしや百吉気　常陸　如風

気歟く序手押やる札の中　仝

葉子録く心もさかし祇気　可帰

心さへ錦なりけり百吉気　東暁

吹送り風もまらさぬ気の筆　静里

祇ふすまを透すわらの家世ぶ　巍琴

ふすま着て寒く帰や海の音　上毛　五山

座心ぞ覚しさまで祇気　柳司

気しらぬ敷物厚ましふすまぶ　青圃

寒からす粗風に軽紀気の筆　閑茶

松島の宿も見て来てふすまぶ　晩翠

前心して私の西行帰去来れ　寸芳

蒼くとも家寒を厭ふまじ気ふすま　尚雲

揉むしてを加し今宵子新　著祥

湯婆

さくられぬ湯婆とすぐぬひと歎きお　嗜風

種てうしろに仕たるたんぽうれ　清芸

膝のたりまに湯婆が　為勤

寐て気人もつと抱せる湯婆哉　孝川

略種湯婆を水よもとりん季　一色

さめきらぬ湯婆能遺りく　素人

起されハたんぽの去かし床の中　里生

至し新を知るや湯婆の抱きこ仏　精子

寄る年に慕ゆしうなる湯婆ぶ　祥松

明の隆盛まれ　実也すこうれ　宝海
孫とそ其親は抱き妙湯婆哉　義琴
抱れたる親を抱きたる　たんほうれ　琴芳
嫁の世話老の恢ふ多んかう事　井月
孫て抱れは屋を繁しき湯婆ぶ　可山
明の孝をそて治ふたんかうれ　魯石
家色を待人はるき湯婆ふ　浦尾井
孫人や孫と湯婆を　太左　其山
乳母の恩湯婆ふ　初冬也　仝
老い明笑ふて抱る　たんかう事　常陸　柳風　仝
親を抱ふ親を知ぬ湯婆ぶ　仝
老ふふ湯婆の味を知ぬ　可芳

起ふををしき暗ふの湯婆うれ　琪園
鈴ふ眼のをそて治ふ死たんかぶ　吳屯
巨燈ふ祝湯婆の朋さふ　文禮
孫てぬくをそ孝ふ老ふる湯婆哉　芳緯

雪車

笑ふ船湯くつをぬ雪車の道　月静
雪ふ男の上をふふ小橋ふ　秀川
引上げて引ふ息つを雪車　友山
焚火して雪車待ふ宿の妻子　樵翁
房ふ行や酒ふ引ふつ雪車の上　東洲
習ふふれての雪車の川柳撫　上毛　松洲
松明ふ灰驚れふ雪ふの仏　三竹

雪車喫のとつもや家のうしろうら　士行
眼よとまるるあるかたく雪の走龍　近山
雪車曳こあくふ月さるすそりぶ　常儀
旅人の雪をたをを貸す小坂うの　文啓
曳こ人のひうて雪車のとつ　三樹
雪車の縄つけ雪ーりり下り坂　貫山
行違の雪をや五ま雪うまて　蓬殘
雪車曳よぜれいきさふうたりり　如枫
山の雪車ーー行や新雪も　義琴
雪を曳にるすうて光ぶ　陶美
雪車曳の寄れ景色ぶ　鈴亜
雪を伝ひ儀も雪ん地を　亀齡

彩彩や引く筋光る雪車の色　楽友
雪を曳まれ加減や下り坂　仁
急うせて泥ぶりすや雪車の上　曲肱
雪車男や亦の能く今うく若妻婦　晩翠
艶恥ーりとれ雪の方れぶ　吉窓
人雪ーー雪をを白雪色の黙うれ　半窓
坂切れて雪車の便を待ふ口ぶ　東京　一鞠
来くあくも続くや雪をたた坂者　芳津
雪車の跡踏伝気安き峠うれ　文禮

橋

橋や引く筋光の糸魚川　来暁
橋をるうくく来るや酒機嫌　梧桐

橋や ひまの入る程 黙史
橋や 雨ふる気歩き 半窓
橋や 細き色 雪ま 浦梅
橋ゝ ゝ ゝ 閑茶
橋や なれ稲穂 素竹
橋や 隣ま 法味
橋や 初ひの外 梅白
橋の 豆売 戸口 呉竹
橋や 豆 むらの 泡巖
橋や 豆 毎 一気の 睡痴
橋や 雪 雷 風奏
橋や 大 声の 松虬

橋や はきの人 掛 雲峰
橋や 初 分 なら 道 東陵
橋を 行 ゝ 市 友山
橋や 泥の 屠 仝
橋や 幼 道 雨
橋や 大 連 あ 月静
橋や 松の 横 豆の下 文禮
橋や 出 立 芳緑

霙

みぞれを除 る 新 旅 雪
ひき 沼の 声 嘯風
提灯の 消 れる 春峰
以孝

牛ひく声や霜くれ道　清芝

霜毎の後ろ見あとの霜くるな　羽前　加風

雛鶏ゆる脚つかみそれる事　空海

外風呂に傘さして霜くる事　東曉

みぞれ雪に似合はぬ山かせぎ　泳嘯

傘も身も曲てゆくみぞれうな　近山

かくへうむ薪や　ちきりに降る霜　其山

音もなく眼にきらめき霜くるな　半窓

風流して足定めう柳　しぐれ霜　芳絲

ひと先の雨にはさまれ霜くる事　文禮

冬至

魚賣の葉ゆ戸　冴く冬至うな　上七　歴山

きさらぎも冬至なれ　冬至うな　戦琴

猶へ日のきらきらつく冬至の系　一鼎

屋からゆ客の影よ入る冬至かな　一徹

花信の日あり　冬至うな　其我

暦より慢なりけり冬至梅　士行

影よ入て去る冬至　井月

殊京　北斗の光る冬至うな　都〻美

窓もきす日にかくろ冬至うな　嘗嫌

掃忘れ　新きつくき冬至うな　蓮残

日ゆ物の新くう伸　冬至うな　棋園

煙草屋の百八歩より冬至から　梧栖

ゆきすす日も暮とけり冬至事　歌年

冬ごもりと伸しの日脚や冬至湯　相模　西夢

梅赤室咲きて水きる冬至かな　閑茶

二度風呂に入るも冬至のゆうべかな　素竹

梅よりも早く名に乳の出く冬至哉　一和

海山の花走り醫師の冬至哉　法味

冬あしまゆるみのうゆる冬至かな　閑美

月の影のちかしうちる冬至哉　東暁

たのもしう初る山冬至の日さして　友山

延びゆの赤よりもれぬ冬至哉　梅瓶

産婦の子に赤の出く冬至哉　法兵

朝起の家美しき冬至かな　素泉

立安き月日指折る冬至かな　貞峯

新戸出に晴れ不二見る冬至かな　梧風

沖樹の雲霧まようる冬至かな　文通

心しく人の洗れい冬至哉　可山

産湯しまるや冬至の花もらひ　芳拝

早咲

早咲や外の赤ならい海の花　義琴

早咲や来る人こそ知る冬ごもり　雙松

早咲や毎日伸て日のうらら　信濃　如芹

はや咲の花よ出るて日脚かな　如風

早咲やぬくき小庵よ香のあまり　浦尾女

もの咲や庵を新しら蕎のうみ　月洲

早咲や惜まるゆのもや蕾る　仝

早咲の梅や活てある座敷哉　湛園
早咲や初と日ざすと香の生む　杏窓
早咲を提て立さ入　葉の細鐵　弗錦
はや咲や名のある人の下屋敷　晩翠
早咲を高買仕たり　植木市　赤曉
早咲や風うち日ト立葉　黙史
早咲や名のある家よ　梅椿　月舟
早咲の梅や手南も　ほろろ　向栄
早咲や寒い日あれと　さら人ま　聽泉
はや咲を祝く旭の白ひ　一雪
早咲もありけり御師の庭の内　友山
早咲や　イ　色　寒　ア　ト　の立　丈芳

早咲や知らせ　ゆ　ら　ト　人の来る　仝
早咲やあちの油の　ら　ゆ　紀　芳緑

新生姜

洗ふ的箸も白ふよ　新生姜　素峰
付たれハ姿ハ信きなし　新生姜　為勧
紅梅の生むをりや　新生姜　祥松
蘇れたる玉ゆも　香あり新生姜　如風
塩ふ信も咲ぬれさうな　新生姜　黙史
湯豆腐に添て　ゆ　ら　ト　新生姜　士行
味ひを　色　ま　ま　ア　セ　ア　新生姜　雲峰
拵られぬ葉の白ひなり　新生姜　可山
紅市や西も香にたち　新生姜　芳緑

鯛味噌

鯛味噌や 囲碁止めて書く禮紙　閑葉
鯛こそや 妻の手深くはれぬ　一和
鯛味噌や 西の宮うらよ便り　ゝ昇
鯛こそと 無よ初れし 冨の禮　東晩
鯛みそや たしなめのよれ 老夫婦　松巳
連れ〳〵なる鯛味噌 口切て　嶽琴
鯛味噌の風味 もてむ 茶漬哉　文啓
鯛味噌や 出産屆くや 舟の中　逸我
鯛こそや 虜ひて手こそ恵比須紙　半意
味噌よまば しての巻れや 鯛の味　杏意
鯛味噌や 鼻ちく 食す 客主人　晩翠

鯛味噌を たゝえて 家老清うす　曲肱
鯛味噌や 茶の食ふまた 元山味　祥松
鯛こそや 家作りしも 年の徳　格風
鯛みそや つひ西 たる 孫酒うす　紹菊
鯛味噌や きさ足舞 の 世も 尚史
鯛味噌や 精進 茂よ 古あ人　芳緑

暖鳥

寒を 法華て 祈る 鶯　唯風
暖鳥 松を 声 紀 新酒の 年　亦峰
はるされて ちこ元 ちく 暖鳥　淇山
拾ひ 鉢 もと 行 きぬく 元鳥　友山
神の 本 そ て 飛らん 暖鳥　近山

[illegible]　青圃
[illegible]　杏窓
[illegible]　洋窓
[illegible]　芳緒

ひと吽ひとを嵐の暗鳥　芳緒

雜冬

冬の月も油のきえぬ夢の中　吳峯
金剛の磨ぎも冬日向にて　五山
冬の船を焚火に乗り山家　瞳痴
冬の雪の海山家もよい日向　琴芳
冬の外動きもなしの鄙信も　相模　鄙痴
冬の里　芳

[illegible]　常陸　枕風
冬の早稲千島の國の船便り　未曉
冬の雨の夜庭もなかれ家　左
[illegible]を苦にせぬ健[illegible]冬三月　梧桐
[illegible]れ　他大將や冬の陣　一山
降ものこるこの冬の宣極樂　文禮
[illegible]冬の[illegible]　芳緒

年忘

是ぞうの粧進日の年[illegible]　喰風
[illegible]年忘　一多
[illegible]子の[illegible]　羽前　枕風
[illegible]年[illegible]　友山

年忘下戸も気の浮く　逸水

業へ日の中や半日　とし忘　調梅

るも今日出さうなせんべい　上毛　吟雨

長旅や酒の年　新を中し忘　嶽琴

不意の年の連を相手や　年忘　梅白

後会て酒の中や　旅の年暮れ　時月

老も老連よ別れ　年忘　一鼎

旅好の旅の酒　や年暮れ　術巖

浮世とも今年を新酒とし忘　柳司

酒くさい小酒の酒　年忘　呉童

茶小言て酒よ更ふや　年暮れ　晩翠

老の子や孫子　拾へてとし忘　松机

年暮れ下戸に酒くさい　雲煙

送られし道も受人に年暮れ　芳緑

岡見

さとしの田畑の中　工事見えなる　唯風

我くらい大連よなる岡見の亀　素泉

知らぬ男ばかりの丘見ぶ　浮美

松枝も親の傷よ　寒見山　梧風

芸者吟る寒の　見えのもと　友山

寒里を眺めての岡見うな　如芥

よしあるを其人あるを　如楓

立ぬて弟に並ぶ　おかみの亀　梅白

けなる子ハ連られぬ岡見可奈　松か

更る戸に雪ん信成る閑足こなる　雪花
笠取して来るや乗々の下り坂　連
きそこそ伝眼の届きたる窪足こなる　一如
歌の蓑大るに句して閑見こなる　其燭
うつ玉心うつきぬ丘足こなる紫　風歩
宿り急入れてひまこそる窪見こなる　可山
岡見したあこや心もいとゆかし　亮鈴
星新の蓑にきらたく閑見可奈　吳雪
心る獨人に悼る初うみこなる　曲脱
心ゆ義も足て来て窪足こなる　白人
心直の道に筋に丘見こなる紫　芳緒

陳夜

陳夜色こそ蔦の中なる掛行燈　嗟風
箸亭は眠亭は心たる陳夜の膳　月静
に〻の悔り活色や陳新の雪　嘉峰
心て海色心てなる色りる陳夜の室　琪山
紙に〻や陳新の禁少る嫁に新　素泉
梅に香こそ初の句り陳新の明り　巌琴
行句に〻や吾心庵ふまて陳新の酒　三歩
老これは陳夜も頼句に初もひけり　玉桂
陳新の鐘更てゆること窘きこそ　歴山
伸にこそ嫁に〻や陳夜の紅ひ蕾春　雙松
梅活て明こそたる陳新こそ森　多城
陸鶴き下枕の音こそ陳夜の町　琴芳

蕎麦喜も疲る声かな　除新の滝　湖巌
あるものを忘れて除夜の焚火哉　貫山
江舟を蕾よ除夜の鐘撞け　花鶏
忙し紀年を活色ろう除新の雪　淇園
除夜の除盟日咲く梅を筆入れ　在
鶏もや除夜の灯更し　奥屋浦　梧栖
旅もとりし紀年ふ除夜の風呂　晩翠
筆ふる幼なんや除新の滝　青圃
起て居るやすする除新の池の魚　魯石
除新の灯の沸を照らすや大港　法味
除夜の海梅ふつけい箸くなり　月待
白水

せきしなき物の除夜の鐘　柳
除夜一百八灯悩撞すてく　文
夕暮るる事に箸きそかく除夜の滝　礼

地中着こ八風のうらかく桐一葉　芳
竹が編戸を　西京　須
跳て居る鯨を解る月新　律
大工も早う仕舞ふせて亀　夷
世ろう化る羽織を着る冬至哉　律
寒ひ化る種馬　夷

大根蕎麦肴に酒を引くみて　徒夫
懐しい時も申　念仏　徒夫
なつかしく昔を思ふ紙　徒夫
祝を祭りて暮む北嵯峨　徒夫
夕に袖ぬれ夢の色まさり　徒夫
桜花の半ばかすのなる月　徒夫
神雲雲立風なれとも仰はらし　徒夫
竹を洗書の節をすこ帝か　徒夫
粉葛けて葛は駒のうちまれ　徒夫
初雷のあとをもたなし　徒夫
雲山にわきをかまきき花の色　徒夫
出の寄はりつる　嘉林

中二階雛祭のもてなすに　徒夫
多品は種を活てもてなせる　徒夫
無沒の鯉い割るを深のれ　徒夫
深信　通る　五十三驛　徒夫
冷し氏覧の水にうかくと　徒夫
橋多は声ゆく　徒夫
宿直呂す頃にちらみし渡り殿　徒夫
今日信孟子の輪講が開む　徒夫
玉蔵の金てもうらぬ俳意よ　徒夫
浪琴溝を遷すにこされぬ　徒夫
行燈の明るきうぬ月の照　徒夫
露とぬかふと共にこるる　徒夫

二ウ

盆掃除出来て家内清見寺　律

落葉中に旅を慰む　琴

立ちながら合財袋結しめて　琴

花は面ならあひるのやうし　律

幕串を折迷ひ音ほ騒ふ　琴

眠られし蝶の夢や覚なん　律

山里の冥賞足ゆるや蕎麦時　上七　峩琴

鶴洲小霜の紅葉　紅風　芳律

旅籠膳滞留客を別はして　琴

ウ

貸硯まハ立流ひ　琴

ちり火入らぬ程なる月明を　律

橋を越ゆる踊ひと船　琴

新浮の秋ハ佐渡ゆく寒し　琴

初月ぬ金に変れる小万年　琴

肝煎ちやたて亲雲な　獨住　琴

駒を刺ぬら芳ら　琴

梅ら香の強りし祐ゆうかり　琴

月ぬ出てからぬ初ちす菖蒲湯　琴

いうるあつ魚荷の皆捌け　琴

船伝よちち飯ぬ喰さよ　琴

金比羅の矢言ちハ人ちく長く　琴

弱い子よりは不憐かなる
日のさゝぬ方へいきらせ花蓮
照らうと帰て物さびしき
二オ
きゝ小紙衣羽織の主
搗へる流石五百石取
菩提寺の寮進に尾一を持
畠漢にて牛のちの道
小童か笛を上手に吹すみ
火桶つくりて廣き奥の間
高臺に鶴よき洲の手牡丹
物ひ合ひる恋を思ひ
よく吟ら緊来れの京育ち

律琴　律琴　在琴　律琴　律琴　律琴　律琴　律琴

心立きうとく脚半股引
塀の自来りに尾を引上て
二ウ
新酒のあとに好物新蕎麦
蹴鞠手ゝ乾のぬらもの家鴨
國寺より下向待ら手りと
とつまゝかゝて行ら花日和
雛の伽をかはり合ら
料理博士ひつそりすれ賀唱田懸
蕎麦迄手のを暮てから知る

律琴　律琴　律琴　律琴　律琴　律琴　律琴　律琴

明治廿八年十二月十八日印刷
同　年同　月廿二日發行

東京南豐嶋郡戸塚村字下戸塚四百壱番地
編集者　大舘兼太朗
同　所　大舘整一
印刷兼發行者
東京日本橋區通三丁目
發賣書林　小林新兵衛